

令和 6 年 6 月 27 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00532

研究課題名（和文）古代中国語方言の動態的研究

研究課題名（英文）A Dynamic Study of Old Chinese Dialects

研究代表者

松江 崇（MATSUE, Takashi）

京都大学・人間・環境学研究科・教授

研究者番号：90344530

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究では、上古中国語（殷から春秋戦国・前漢）から近古中国語（唐五代）までの時期における中国語を研究対象として、文法・語彙面での通時的变化に関する様々な言語現象を解明することを試みた。主要な研究成果としては、（1）上古初期（西周時期）における社会方言の解明、（2）上古後期（漢代）における東齊・海岱方言と遠方の秦方言との間の言語的接近性の発見、（3）上古から中古（魏晋南北朝）にかけての江東地域における動態変化モデルの提出、などが挙げられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

古代中国における言語面での地域的・階層的差異の明示や、それらの動態的な変遷を跡付けは、中国語史のみならず、歴史研究（とりわけ地域史研究）や文化史研究に対しても貢献し得るところがあり、ひいては古代中国の多様性の内実を明らかにすることにも資するところがあると考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study investigated diachronic linguistic phenomena related to grammatical and lexical changes from Ancient Chinese (from the Shang to the Western Han dynasty) to Medieval Chinese (Tang and Five Dynasties period). The main research findings are as follows: (1) We elucidated the existence of social dialects in the Early Ancient Chinese period (Western Zhou); (2) discovered linguistic similarities between the Dongqi-Haidai dialect and the distant Qin dialect during the Late Ancient Chinese period (Western Han); and (3) proposed a dynamic change model for the Jiangdong dialect from Ancient Chinese to Middle Chinese (Wei, Jin, and Southern and Northern Dynasties).

研究分野：中国語学

キーワード：古代中国語 動態的变化 揚雄『方言』 甲骨文・金文 否定詞 上古音 びん方言 円唇母音

1. 研究開始当初の背景

豊富な文献を有する古代中国語研究は、千年以上の期間での言語の通時的变化を議論し得るという、歴史言語学からみれば類い希な好条件を備えている。そして、近年の中国大陆における研究者の急増、電子コーパスの発達などを背景として、古代中国語の文法・語彙の研究はめざましい進展を遂げており、様々な時代の文献について、その文法・語彙を記述した共時的研究が相次いで出版される様相を呈している。さらに、上古における戦国楚簡などの出土資料、中古中国語における早期漢訳仏典、近古中国語における敦煌変文など、同時性および均質性の高い資料の解読が進展したことにより、各文献の基礎方言の違いを織り込んだ、古代中国語の時空間にわたる動態的な変遷モデルが提案され得る条件が整えられたと言ってよい。よってこれらの同時性・均質性の高い資料を踏まえた上で、従来の研究において主流であった、上古から現代までが単線的に結ばれた線上で語られる方言差異を軽視して時間軸上のみで語られるところの古代中国語の文法史・語彙史は、大幅に書き改められる可能性が生じてきた。

2. 研究の目的

古代中国語 上古(殷から前漢)から近古(唐五代)までを研究対象とする において、文法・語彙面においてどのような方言差異が存在したのかを明らかにすることが目的の一つである。さらにその方言差異を踏まえた上で、時間軸における変化と空間軸における拡散・伝播のプロセスとを有機的に結びつけるかたちで、当該時期に生じた中国語の動態変化の内実を可能な限り詳細に描き出すことが最終的な目的である。

3. 研究の方法

研究対象を、上古から近古までの時期(殷～唐五代)に限定し、次の三種の研究を実行した。

(1) 上古から近古の間の同時性・均質性の高い資料を選定した上で、重要ないくつかの文法・語彙項目について、各文献における共時的状況を記述し、時代毎に如何なる方言差異があったのかを明らかにする研究を行った。

(2) 漢代の方言語彙集である揚雄『方言』に対する研究を推し進め、漢代方言間における同一或いは同源の語彙が一致する頻度(「語彙一致率」)を調査し、方言間の言語的距離を計測した。

(3) 上述の方法によって得られた結果を踏まえ、上古から近古に至る文法・語彙項目の変遷モデルを提示した。

本研究の分業は以下のような体制で遂行された。代表者である松江は、漢代の揚雄『方言』および中古の漢訳仏典、近古(唐五代)の敦煌変文などの文法・語彙項目の記述研究を行うと同時に、全体のとりまとめを行った。戸内は、上古(殷～前漢)の甲骨文・金文、春秋戦国期の出土資料の記述研究を担当し、同じく分担者である野原は、同じく出土資料を含む上古資料における語彙について音韻面からの考察を行った。

4. 研究成果

本研究で得られた成果は多岐にわたるが、最も主要な成果を記しておく。

(1) 上古初期中国語における社会方言的差異の存在

戸内は、上古初期に属する殷代甲骨文、西周金文、春秋戦国時代の出土文献、伝世文献に見える否定詞「弗」「勿」の各時代における文法機能に対する調査や、判断文を表すのに copula を用いるか、それとも名詞述語を用いるかといった観点を通して、西周金文が反映する言語が、王室メンバーの対話や、王室の儀式、王室の儀式を模倣した諸侯の儀式で用いられる正式言語と、

非王室メンバー同士が用いる口語性の強い言語の二種類の社会方言に分けられることを見出した。さらに は甲骨文が反映する殷代中国語から継承されたもの、 は西周時代の新興の方言で、先秦諸子文献が反映する春秋戦国時代の上古中期中国語に継承されるものと仮説を提出した。この見解は、今後の研究に対して、上古中期漢語の成立に関わる重要な観点を提供するものと言える。

(2) 個別の上古中国語語彙の地域性と少数民族語の影響

野原は、楚簡を中心とした個別語彙の祖形の再構および歴史的な音韻変化に関する研究を進め、<卵>、<泉>、<犬>を表す語彙を対象として、いずれも楚簡や秦簡に文字が見え且つ福建省を中心に使用されるびん語(びん祖語)との関係が深く、複雑な背景を有する語彙であることを確認した上で、<卵>、<犬>を表す語については、苗瑶語(Hmong-Mien languages)のような周辺言語からの借用語である可能性が高いことを指摘した。また、秦簡に見える通假字の整理および秦簡に見える語彙の再構を進め、<稻>や<婿>を表すと思しき文字について、文字・上古音・苗瑶語・諸方言(主にびん語)のデータに基づいて、秦簡では[匕止山]に作る字を<稻>を表す文字と同定しつつ、North Hmongic や East Hmongic の<稻>と同源であることを明らかにした。

松江は、揚雄『方言』において「北燕」「朝鮮」方言と指定される語彙について、古代中国語文献に見いだされるか、中国語(漢語)的語構造と解釈し得るかといった観点から分析を加え、そのほとんどが中国語として理解し得ること、しかし一部には中国語として解釈が困難なもの(「傑懶」など)も含まれることを指摘した。従来、あまり検討されることのなかった上古中国語の北部方言と北方の非漢語系民族語との関係を確認することとなった。

(3) 上古後期以前における長江以北の中国語方言の動態変化

漢代の揚雄『方言』所収の語彙を題材として、長江以北の方言間の動態的变化を、方言間の「語彙一致率」の観点により推定した。その結果、長江以北・北燕以南の方言は、おおよそ東齊・海岱方言(極東地域)、魯・宋方言(東方地域)、秦方言(西部地域)に分けられるが、地理的距離の点ではより遠いはずの東齊・海岱方言と秦方言との語彙一致率が、東齊・海岱方言と魯・宋方言のそれよりも強いこと、魯・宋方言はその南部の長江流域とのつながりが強いことを発見した。これらの現象を踏まえつつ、長江以北・北燕以南はより古い時期には同質性が強かったのであるが、魯・宋方言が南部の影響を強く受けたために如上のような状況が出現したとの仮説を提出した。その他、北燕・朝鮮方言の内部差異について検討を加え、そのなかの「燕之北郊」「朝鮮」地域は、「北燕」地域よりも複音節語の出現率が高いことを指摘し、それが非漢語民族言語の影響を受けた結果である可能性を示唆した。以上の動態的モデルは、松江(2006)で示した漢代方言の静態的状况を基礎としつつも、それを補足し、動態的な変化を付け加えたものとなった。

(4) 江東地域を中心とする上中古間の動態変化

松江は、上古から中古の疑問文末助詞「乎」「與」「邪」などに着目し、それらの地域的分布と通時的変化について、とりわけ長江下流域の江東方言に着目しつつ検討を進めた。中古初期(魏

晋)の江東方言は、「乎」を多用し「邪」が稀少であるという上古中期の東方方言からの継承性が見出される点で、「邪」を多用する中原の洛陽方言とは大きく異なっていたのであるが、中古後期(南北朝)以降は、洛陽方言・北方方言に大きく近づいたこと指摘した。このような動態的变化は、松江がかつて二人称代詞の体系や、人称代詞の複数形式といった語彙項目に基づいて提出したモデルの枠内に収まり得るものであり(松江(2000))、疑問助詞に関する研究は、当該のモデルの妥当性を支持するものであると同時に、修正を要する箇所も確認することとなった。

(5) 関連する言語現象についての主要な研究成果

上記の研究成果は、古代中国語の方言差異または動態変化の解明に関するものであるが、それ以外にも関連する以下のような研究成果が得られた。

戸内は、上古初期、殷代の数量表現を網羅的に調査し、甲骨文が反映する殷代中国語には、原則的に個体量詞(classifier)という文法範疇はまだ成立していないが、名詞「人」のみが個体量詞の萌芽的状态にある可能性を指摘した。

野原は、上古音研究にかかる諸仮説について検討を加え、特に円唇母音仮説(the rounded vowel hypothesis)については、現代のびん語にその痕跡が残留していることを示した。これはびん祖語が在証されたとも言い換えられよう。

松江は、上古中期の魯方言『論語』『孟子』における疑問文末助詞「乎」「與」の機能差異について検討を加え、「乎」は無標質問文に用いられるのに対して、「與」は「命題に対する話者の判断の思い惑い」を表出する疑惑文に用いられることを指摘した上で、「與」が「也」と「乎」の合音により成立したとするGraham(1957)の説を機能面から支持した。

<引用文献>

- ・松江崇(2000)「中古初期二地域における二人称代詞」、『人文学報』311, 147-164頁.
- ・松江崇(2006)「漢代方言中的同言線束——也談根據方言的方言區劃論」, 華學誠匯證·王智群·謝榮娥·王彩琴協編『揚雄方言校釋匯證』(下), 1509-1533頁. 北京: 中華書局.
- ・Graham, A. C. (1957). The Relation between the Final Particles “yu”與 and “yee”也, *Bulletin of the School of Oriental and African Studies, University of London*, Vol.19, No.1.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計33件（うち査読付論文 25件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 15件）

1. 著者名 松江崇	4. 巻 6
2. 論文標題 浅談漢代東部、北部方言的動態変化	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Grammatical Phenomena of Sino- Tibetan Languages	6. 最初と最後の頁 197-211
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 松江崇	4. 巻 5
2. 論文標題 談漢語第三人称代詞“他”的生成機制	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 清華語言学	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 戸内俊介	4. 巻 10
2. 論文標題 上古漢語非真實情態成分“其”	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 中国語言学	6. 最初と最後の頁 22-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 戸内俊介	4. 巻 2
2. 論文標題 西周漢語非真實情態成分“其”	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 雲漢	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 戸内俊介	4. 巻 6
2. 論文標題 殷商漢語數量表達研究 兼論漢語個体量詞的来源	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Grammatical Phenomena of Sino- Tibetan Languages	6. 最初と最後の頁 145-176
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 戸内俊介・野原将揮・海老根量介・宮島和也・宮内駿	4. 巻 2
2. 論文標題 安徽大學藏戰國竹簡 (二) 《仲尼曰》譯注 (1)	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 雲漢	6. 最初と最後の頁 23-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 野原将揮	4. 巻 2
2. 論文標題 浅談秦簡中的“=”字	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 出土文献	6. 最初と最後の頁 100-105
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 NOHARA, Masaki	4. 巻 -
2. 論文標題 Another character for the word “rice plant” in Old Chinese	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Bulletin of the School of Oriental and African Studies	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 松江崇	4. 巻 1号
2. 論文標題 試談敦煌變文中的兩類名量詞及其語義功能的差異	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 雲漢	6. 最初と最後の頁 71~82
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 野原将揮	4. 巻 -
2. 論文標題 《漢簡語彙考證》訂補(四) 訊	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 簡帛網	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 野原将揮	4. 巻 28
2. 論文標題 構擬上古音*kr-:以《安大簡》「luan」為例	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 聲韻論叢	6. 最初と最後の頁 97~114
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 秋谷裕幸, 野原将揮	4. 巻 5
2. 論文標題 [門+虫]語中来自*m.r- 和 *ng.r-的来母字	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 辞書研究	6. 最初と最後の頁 1~23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Nohara Masaki	4. 巻 Volume 24, Issue 2
2. 論文標題 Old Chinese “egg”: More evidence for consonant clusters	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Language and Linguistics	6. 最初と最後の頁 325 ~ 344
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1075/lali.00133.noh	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 野原将揮	4. 巻 1号
2. 論文標題 略談“非”的上古音及相關問題	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 雲漢	6. 最初と最後の頁 34 ~ 47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 松江崇	4. 巻 No. 2 (岩田礼教授栄休紀年論文集)
2. 論文標題 揚雄『方言』所収の「北燕」「朝鮮」方言語彙の性質	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 地理言語学研究 (モノグラフ)	6. 最初と最後の頁 134 ~ 150
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5281/zenodo.6342364	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 戸内俊介	4. 巻 2021年第3期 (総132期)
2. 論文標題 殷代時間介詞“于”の語法化過程之考察 从“将来時指向”の視角出發	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 古漢語研究	6. 最初と最後の頁 83 ~ 96
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.19888/j.issn.1001-5442.2021.03.007	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 戸内俊介	4. 巻 No.2(岩田礼教授栄休紀年論文集)
2. 論文標題 殷代単位詞芻議	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 地理言語学研究(モノグラフ)	6. 最初と最後の頁 165~181
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) 10.5281/zenodo.634	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 秋谷裕幸、汪維輝、野原将揮	4. 巻 No.2(岩田礼教授栄休紀年論文集)
2. 論文標題 説{狗}	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 地理言語学研究(モノグラフ)	6. 最初と最後の頁 264-280
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) 10.5281/zenodo.6342364	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 野原将揮	4. 巻 -
2. 論文標題 秦簡牘通假例	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 センター研究年報2021	6. 最初と最後の頁 1~89
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 松江崇	4. 巻 -
2. 論文標題 略談“動詞+補語”型使成式的拡大機制 - 以早期漢訳仏典中“他動詞+在/到”型使成式為例 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 仏教漢語研究の新進展(朱冠明・龍国富編)	6. 最初と最後の頁 241~251
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松江崇	4. 巻 -
2. 論文標題 古代中国語における漢字の表語現象の諸相	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本語文字論の挑戦 表記・文字・文献を考えるための17章（加藤重広・岡墻裕剛編）	6. 最初と最後の頁 59～80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 戸内俊介	4. 巻 24
2. 論文標題 海昏侯墓出土木牘『論語』初探	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中国出土資料研究	6. 最初と最後の頁 24～52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 戸内俊介	4. 巻 11
2. 論文標題 「不」はなぜ「弗」と発音されるのか 上中古中国語の否定詞「不」「弗」の變遷	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 漢字文化研究	6. 最初と最後の頁 75～106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 戸内俊介	4. 巻 -
2. 論文標題 漢語と外来語	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 講座 近代日本と漢学 第7巻 漢学と日本語（佐藤進・小方伴子編）	6. 最初と最後の頁 24～46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野原将揮	4. 巻 19
2. 論文標題 音韻をしらべる	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 漢字文獻情報処理研究	6. 最初と最後の頁 155 ~ 179
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野原将揮	4. 巻 -
2. 論文標題 研究上古音：證據與蓋然性～以“少”字音為例～	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 第十八届国際[既+旦]第三十八届全国声韻学学术研讨会論文集	6. 最初と最後の頁 1 ~ 14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 戸内俊介	4. 巻 -
2. 論文標題 再議甲骨文中の否定詞“不”與“弗”的語義功能區別 兼論甲骨文的非實格動詞	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 文字・文献・文明 (田[火+韋]主編)	6. 最初と最後の頁 11-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野原将揮	4. 巻 12
2. 論文標題 構擬“泉”字音 兼論“同義換讀”	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 中國語言學集刊 Bulletin of Chinese Linguistics	6. 最初と最後の頁 74-87
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1163/2405478X-01201004	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 松江 崇	4. 巻 2019年春之巻 (總第25巻)
2. 論文標題 漢語疑問數詞 “ 多少 ” の生成機制 - 兼談中古疑問數詞系統的複雜性	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 中国語言文學研究	6. 最初と最後の頁 6~7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松江 崇	4. 巻 2 (使役の諸相)
2. 論文標題 古代中国語における動補型結果構文の拡張メカニズム 「他動詞 + 在」結果構文を例として	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 シナ = チベット系諸言語の文法現象 (池田巧編)	6. 最初と最後の頁 205 ~ 217
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 戸内俊介	4. 巻 2 (使役の諸相)
2. 論文標題 再び甲骨文の「不」と「弗」について 使役との関わりから	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 シナ = チベット系諸言語の文法現象 (池田巧編)	6. 最初と最後の頁 219 ~ 238
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 秋谷裕幸・野原将揮	4. 巻 1
2. 論文標題 上古唇化元音假説与 [門+虫min3] 語	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 中国語文	6. 最初と最後の頁 15 ~ 26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野原将揮	4. 巻 44
2. 論文標題 「少」の上古音再考 義通換讀から見た上古音再構	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 中国文学研究	6. 最初と最後の頁 66～81
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計52件 (うち招待講演 19件 / うち国際学会 30件)

1. 発表者名 松江崇
2. 発表標題 古漢語中語義範疇的生成及其発展的若干問題
3. 学会等名 中国人民大学「当代語言理論与漢語研究」系列學術報告 (オンライン) (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 松江崇
2. 発表標題 古漢語時点、時量疑問代詞の類型与歴時演变 上古至近古
3. 学会等名 中国語言歴史地理研究論壇2024 (オンライン) (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 松江崇
2. 発表標題 古中国語の疑問文末助詞「乎」「與」の機能分析 合音説の再検討
3. 学会等名 神戸市外国語大学「アジア諸言語の接触と変容：通時的・共時的観点からのアプローチ2023年度 研究会」
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 戸内俊介
2. 発表標題 上古漢語否定詞“不”“弗”演变補論：兼論“不”分勿切的讀音来源
3. 学会等名 北京大学「漢語史与出土文献系列講座」『基于出土文献的語法研究』（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 戸内俊介
2. 発表標題 殷商漢語数量表達研究
3. 学会等名 北京大学「漢語史与出土文献系列講座」『基于出土文献的語法研究』（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 戸内俊介
2. 発表標題 西周金文中的社会方言
3. 学会等名 北京大学「漢語史与出土文献系列講座」『基于出土文献的語法研究』（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 野原将揮
2. 発表標題 “裏”的上古音以及苗語的{穗子、袋子}
3. 学会等名 第21届國際[既+旦]第41届全国声韻学學術研討会（招待講演）（國際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 野原将揮
2. 発表標題 虎溪山漢簡《食方》中の“[米婁]”字和“𠄎”字
3. 学会等名 出土文献与漢字發展史國際學術研討会（國際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 野原将揮
2. 発表標題 上古音T類声母与L類声母：以出土文献、[門+虫]語為材料
3. 学会等名 長安語言学青年論壇 第4講（招待講演）（國際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 野原将揮
2. 発表標題 里耶秦簡中の“𠄎”字
3. 学会等名 “古文字与上古音整合研究：慶賀白一平先生七秩晋五華誕”國際學術研討会（招待講演）（國際学会）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 野原将揮
2. 発表標題 「多」の上古音声母について
3. 学会等名 神戸市外国語大学「アジア諸言語の接触と変容：通時的・共時的観点からのアプローチ2023年度 研究会」
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 松江崇
2. 発表標題 談揚雄《方言》中東齊海岱方言詞彙的特徵
3. 学会等名 ICSTLL-55 (國際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 松江崇
2. 発表標題 古漢語代詞功能變化的若干模式
3. 学会等名 古漢語詞彙語法研究系列講座 (北京大學中文系) (オンライン) (招待講演) (國際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 松江崇
2. 発表標題 揚雄《方言》中東部、北部方言的若干問題
3. 学会等名 古漢語詞彙語法研究系列講座 (北京大學中文系) (オンライン) (招待講演) (國際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 松江崇
2. 発表標題 淺談漢代北方方言的形成過程
3. 学会等名 Workshop: Chinese Language and its surroundings (國際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 下地早智子・松江崇
2. 発表標題 直進する時間・循環する時間：“前/后”“上/下”の時間指示用法における認知的対立
3. 学会等名 第56回中日理論言語学研究会（オンライン）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 松江崇
2. 発表標題 漢語史における疑問詞節埋め込み構造の変遷
3. 学会等名 第56回中国語文法研究会（オンライン）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 戸内俊介
2. 発表標題 殷商漢語数量表達研究 兼論漢語個体量詞的来源
3. 学会等名 ICSTLL-55（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 戸内俊介
2. 発表標題 見於西周金文の方言
3. 学会等名 Workshop: Chinese Language and its surroundings（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 野原将揮
2. 発表標題 說“稻”与“裏”
3. 学会等名 第13届重建原始[門+虫]語及其相問題工作坊(國際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 野原将揮
2. 発表標題 一个表示{圓}的詞族
3. 学会等名 日本中国語学会関西支部例会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 野原将揮
2. 発表標題 漢語借詞? : 苗語中的“穗子”和“袋子”
3. 学会等名 Workshop: Chinese Language and its surroundings (國際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 松江崇
2. 発表標題 漢訳仏典中兩種功能詞在日本“訓読文”中的反映 浅談古漢語与古日語之間語言接触面貌之一斑
3. 学会等名 第十四届漢文仏典語言学國際學術研討会(オンライン)(國際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松江崇
2. 発表標題 浅談第三人称代詞“他”的生成機制
3. 学会等名 第十二届中古漢語國際學術研討會（オンライン）（國際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松江崇
2. 発表標題 漢語史における反方向性並列型複合動詞の形態素配列について
3. 学会等名 ミニ・シンポジウム「漢語史研究における語彙論と音韻論」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 戸内俊介
2. 発表標題 殷代の数量表現研究
3. 学会等名 ミニ・シンポジウム「漢語史研究における語彙論と音韻論」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 野原将揮
2. 発表標題 浅談“非”的上古音及相關問題
3. 学会等名 第六屆重建原始びん語及其相關問題工作坊（オンライン）（國際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 野原将揮
2. 発表標題 淺談上古音*-r-：以《安大簡》的通假為例
3. 学会等名 舊語新知：古代經典的語言新釋（オンライン）（招待講演）（國際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 秋谷裕幸、野原将揮
2. 発表標題 びん語中来自*m.r和*ng.r的来母字：兼論原始びん語在漢語史上的位置
3. 学会等名 語言学前沿与漢語史研究講論（オンライン）（招待講演）（國際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 野原将揮
2. 発表標題 稻の上古音
3. 学会等名 ミニ・シンポジウム「漢語史研究における語彙論と音韻論」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 野原将揮
2. 発表標題 《漢簡語彙考證》訂補（四） “訊”
3. 学会等名 戰國秦漢簡牘在線研讀會（オンライン）（國際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 戸内俊介
2. 発表標題 論上古漢語非現實狀態成分的“其”
3. 学会等名 基于上古漢語語義知識庫的歷史語法与語彙研究・第二次學術研討會（北京大學・オンライン）（國際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Nohara Masaki
2. 発表標題 The Phonetic Loans in “An Da Jian”
3. 学会等名 Recent advances in the study of Chinese rhyming practices in excavated documents (SOAS, University of London) (招待講演) (國際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 野原将揮
2. 発表標題 研究上古音：證據與蓋然性～以“少”字為例～
3. 学会等名 第十八屆國際[既+旦]第三十八屆全國聲韻學學術研討會 證實與擬測 漢語音韻的歷史研究（台灣・東吳大學）（招待講演）（國際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 松江崇
2. 発表標題 從話語分析視角看《論語》《孟子》中疑問語氣助詞「乎」「與」的功能差異
3. 学会等名 漢語語法化的通與變國際學術研討會[既+旦]第十一屆海峽兩岸漢語語法史研討會（國際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松江崇
2. 発表標題 三世紀江南方言の上中古間文法史上の位置づけ
3. 学会等名 シンポジウム「漢語史研究における動態的觀點と靜態的觀點」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 戸内俊介
2. 発表標題 地下から出た『論語』 出土資料から『論語』の原形を探る
3. 学会等名 論語の学校（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 戸内俊介
2. 発表標題 “不”為什麼會有“弗”的讀音 論上中古“不”和“弗”的演变
3. 学会等名 漢語語法化的通與變國際學術研討會[既+旦]第十一屆海峽兩岸漢語語法史研討會（國際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 戸内俊介
2. 発表標題 阪哲評書：戸内俊介『先秦の機能語の史的発展 上古中国語文法化研究序説』（研文出版、2018）
3. 学会等名 阪神中哲談話会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 戸内俊介
2. 発表標題 金文資料における否定詞
3. 学会等名 シンポジウム「漢語史研究における動態的観点と静態的観点」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Nohara Masaki
2. 発表標題 The reconstruction of the word 'egg' in Old Chinese
3. 学会等名 The 52nd International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics (ICSTLL52) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Nohara Masaki
2. 発表標題 The reconstruction of the word Quan "spring, source": *dzan
3. 学会等名 漢字音訳・上古音研究会（東洋文庫）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 野原将揮
2. 発表標題 上古音研究：証拠と蓋然性
3. 学会等名 シンポジウム「漢語史研究における動態的観点と静態的観点」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松江 崇
2. 発表標題 抉擇義疑問代詞“口+那”的來源及其功能擴展機制
3. 学会等名 韓國中文學會國際學術論壇 - 中國古文獻和語言研究的新潮流（國際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 松江 崇
2. 発表標題 揚雄『方言』における「朝鮮」方言語彙について
3. 学会等名 古代漢字音訳資料研究会(第1回)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 戸内俊介
2. 発表標題 再議甲骨文中の否定詞“不”與“弗”の語義功能區別?兼論甲骨文的非實格動詞
3. 学会等名 文字、文獻與文明 第七屆出土文獻青年學者論壇 [既+旦] 國際學術研討會（國際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 戸内俊介
2. 発表標題 出土文献から見る上古中国語の“文法化”について
3. 学会等名 東方学会東洋学・アジア研究連絡協議会シンポジウム「近未来の東洋学・アジア研究 言葉の重みを受けとめ、いかにその壁を超えるか」(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 戸内俊介
2. 発表標題 出土文字資料に見える古代中国語文法の変遷 「其」を中心に
3. 学会等名 漢字学研究会シンポジウム「中国古文字学研究の最前線」(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 戸内俊介
2. 発表標題 「不」「弗」について
3. 学会等名 古代漢字音訳資料研究会(第1回)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 野原将揮
2. 発表標題 Applying the comparative method to reconstruct some basic words in Old Chinese
3. 学会等名 Recent Advances in Comparative Linguistic Reconstruction (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 野原将揮
2. 発表標題 構擬“泉”字音 兼論“同義換讀
3. 学会等名 The 2nd LFK society Young Scholars Symposium, Taipei: Institute of Linguistics, Academia Sinica (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 野原将揮
2. 発表標題 上古音について
3. 学会等名 古代漢字音訳資料研究会(第1回)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 NOHARA Masaki, IKEDA Takumi	4. 発行年 2024年
2. 出版社 京都大学人文科学研究所	5. 総ページ数 271
3. 書名 Grammatical Phenomena of Sino- Tibetan Languages 6 Typology and Historical Change	

1. 著者名 松江崇	4. 発行年 2023年
2. 出版社 京都大学学術情報リポジトリ紅(博士学位論文)	5. 総ページ数 420
3. 書名 古漢語における疑問目的語の語順変化メカニズム	

1. 著者名 二松学舎大学文学部中国文学科編(戸内俊介・共著)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 247
3. 書名 入門 中国学の方法	

1. 著者名 宮本徹・松江崇	4. 発行年 2019年
2. 出版社 放送大学教育振興会	5. 総ページ数 274
3. 書名 漢文の読み方 - 原典読解の基礎 -	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>Workshop: [門 + 虫]語史の新視角 https://kurs10026.sakura.ne.jp/kchgk/youxuan/%e4%ba%ac%e5%a4%a7%e4%b8%ad%e5%9b%bd%e8%aa%9e%e5%ad%a6%e7%a0%94%e7%a9%b6%e4%bc%9a%e3%80%80%e7%ac%ac%e4%ba%8c%e5%9b%9ework-shop/</p> <p>Workshop: Chinese languages and its surroundings https://kurs10026.sakura.ne.jp/kchgk/youxuan/news002/</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	戸内 俊介 (Tonouchi Shunsuke) (70713048)	日本大学・文理学部・教授 (32664)	
研究分担者	野原 将揮 (Nohara Masaki) (80728056)	京都大学・人文科学研究所・准教授 (32629)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計2件

国際研究集会 Workshop: [門 + 虫]語史の新視角	開催年 2023年 ~ 2023年
国際研究集会 Workshop: Chinese languages and its surroundings	開催年 2022年 ~ 2022年

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------